

治験薬で

女

になった俺が

親友に

抱きつられて

男に戻れなくなる話



【ご注意】

本作は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

※この作品には次の描写を含みます。

薬による性転換（男性↓女性）／拘束／道具を使った行為／同意のない性行為

※作中の行為や思想を肯定・推奨するものではありません。

※この物語はフィクションであり、実在の国・人物・団体とは一切関係ありません。

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。

治験薬で女になった俺が、親友に抱きつづかれて男に戻れなくなる話

K
i
r
R

両親が死んだ。多額の借金だけを残して。

原因は寝たばこによる火災だったらしい。だらしない両親らしい、無様な死に方だ。彼らの素行で不利益を被^{こうむ}つてきた朔^{さく}の心には、同情も悲しみも湧いてこなかった。

問題は、彼らが残した借金が二千万円を超えていたことだ。妹と折半したところで一千万円を超える。到底、ネットカフェのアルバイト収入で返せる金額ではない。半年で三十万円ほど返済したが、利息が膨らみ、むしろ借金は増えている。

（どうするかな……）

朔は四畳半の部屋に敷いた布団の上で、ぼんやりとスマートフォンを眺める。泥のような瞳に映るSNSのタイムラインは、怪しげな高額バイトで埋め尽くされている。

（これ、全部闇バイトだよな。わざとらしく【ホワイト案件】とか書いて、引っかかるやついるのかよ）

嘲笑^{あざわら}いながらも、朔はそのどれかに応募しようと考えている。こんなものにも継^{つが}らなけ

れば、借金を返済できないからだ。風俗も考えたが、典型的な陰キヤの朔に接待などできない。何せ、就活の面接で落ちた数は三十社以上だ。

朔はため息をつき、スマートフォンを見たままごろりと横を向く。そのとき、一つの投稿が目に入った。

（治験モニター募集、首都圏、男性限定、一日で報酬五百万……）

いかにも怪しいそれに、朔の心が揺れた。たった一日で借金を半分減らせる。そんなうまい話があるはずないとわかっているのに、誘惑に抗えなかつた。あらが

（これなら暴力もなさそうだし、最悪死ぬだけでもんな）

借金にまみれて生きるよりマシ。そう思い、朔は投稿主のアカウントにDMを送る。すぐに返信が来て、日程の調整に入った。最短を希望すると、早速明日、指定の場所に来いとのことだった。

了解の返事を送ると、同じタイミングでメッセージアプリからの通知が届く。どうやら親

友である朝比奈 蒼汰あさひな そうたからのようだ。

『明日暇だったよな？ 映画行かね？』

（あー……そういえば空いてるって言ったっけ）

朔は申し訳なさを感じながら『悪い、用事入った』とだけ送る。蒼汰からは『わかった。じゃあまた今度な！』と返ってきた。小学校からの幼馴染である彼は、こういう深入りしてこないところがつき合いやすい。そもそも明日は平日で、会社員である蒼汰は仕事のはずだ。朔の予定に合わせて休みを取ってもらうのは気が引ける。いつものことと言えば、それはまあそうなのだが。

朔はスマートフォン画面を消し、床に放り投げる。明日人生が終わるかもしれないというのに、何の未練もなかった。

指定されたのは、暗い路地に面した雑居ビルだ。いかにも怪しいその場所に、朔は迷いな

く入っていく。寒さを感じるのは、秋の冷たい風のせいだ。この間まで夏のような暑さだったのに、今日はパーカーの上にブルゾンを着ても肌寒い。

階段で三階に上り、金属の扉をノックする。想像より重たい音と共に扉が開かれ、人のやさそうな白衣の男が顔を出した。

「こんにちは。治験モニターの方ですね？　どうぞお入りください」

眼鏡越しに微笑む男に促され、朔は室内に足を踏み入れる。外観のボロさとは裏腹に、内装はクリニックのような清潔感がある。知る人ぞ知る名医がいる病院と言われたら信じてしまいそうだ。

男に導かれるまま、朔はふかふかのソファに腰かける。男はソファの前のローテーブルに書類とノートパソコンを置き、一礼する。

「治験モニターへのご応募ありがとうございます。本日担当させていただきます、三雲と申みくもします。どうぞよろしくお願いいたします」

朔もつられて会釈する。三雲の丁寧な様子に、今のところ怪しさは感じない。せいぜい名刺がないくらいだろう。

三雲は顔を上げて朔の正面に座る。眼鏡を押し上げ、慣れた様子でノートパソコンを開いた。

「ご本人様確認のために、お名前をフルネームでいただいてもよろしいでしょうか」

ふかせ
「深瀬 朔です」

「深瀬様、ありがとうございます。二十五歳、男性と伺っておりますが、お間違いないですか？」

「はい」

三雲は朔がDMで送った内容を復唱する。本人確認書類を求められて朔は若干警戒したが、今更だと諦めて渡した。

それが終わると、三雲は朔の前に一枚の紙を差し出した。

「それでは治験に移らせていただきますが、その前にこちらの同意書をご一読ください。問題がなければ、一番下にお名前フルネーム、生年月日、ご連絡先のご記入をお願いします。ご質問があれば遠慮なくお尋ねください」

朔は同意書を受け取り、さっと目を走らせる。

（試験薬はカプセルが一つ、投与は一回のみ……楽なもんだな。これで五百万ってことは、相当ヤバイ薬か？）

そう思いながら、朔は同意書の氏名欄にサインする。気になる文といえば『健康被害が生じた場合においても、当社は治療費その他一切の補償を行いません』と『電話番号および所在地に関するお問い合わせには応じかねます』くらいだ。他には不審なことは書かれていないように思う。ちゃんと『謝礼金は五百万円』というところは確認した。

三雲はサインされた同意書を受け取り、パソコンも持って一度席を離れる。大事なものは先にしまうタイプのようだ。

戻ってきた三雲の手には、カプセルが一つが入った薬包と水の入った紙コップが握られていた。

「それでは、こちらの服薬をお願いいたします。同意書にもありましたが、服薬前であればいつでも辞退できます。また、服薬後八時間は施設内で待機いただきます。八時間より前に施設を出ますと試験未完了となり、謝礼金が支払われませんのでご注意ください」

（それは気をつけなきゃな……）

朔はちらりと時計を見る。帰りが遅くなってしまいそうだが、仕方がない。

朔はカプセルを薬包から取り出す。どうしてピンクという怪しい色にしたのだろうと思いつつ、口に放り込み水で流し込む。ここまできたら、あとは野となれ山となれだ。

そのまま座って待つように指示され、朔はぼんやりと白い壁を眺める。同意書には『一過性の疼痛、発熱、意識の混濁を生じる場合があります』と書かれていたが、十分経つても特に何も起こらない。

（このまま何事もなく、五百万だけもらって帰れたらな……）

おそらくそんなことはないとかわかっていながら、ついそう思ってしまう。当然、何もないに越したことはない。

二十分、三十分、一時間経っても、朔の身体には何の変化もない。もしかして、本当に何事もなく帰れるのでは……と思ったそのとき。

「ぐっ！」

心臓が大きく脈打ち、朔の全身に痛みが走る。身体が熱くなり、急激に汗が噴き出した。

（なん、だ、これ……っ！　こんな、急に……）

朔は胸を押さえてうずくまる。三雲が動揺を見せないあたり、この薬の正常な作用なのかもしれない。

（ああ……俺、本当に死ぬのか）

薄れゆく意識の中、朔はやり残したことを思い出そうとする。しかし何も思いつかず、諦

めに似た笑みを浮かべた。

白い光の中、朔はゆつくりとまぶたを開く。ずいぶんまぶと眩しいそこは、いつも薄暗い朔の家とは違うようだ。

やがて、ぼやけていた焦点が合う。目の前の真っ白な壁を見て、朔は気を失う前のことを思い出した。

（治験バイトに応募して、薬飲んで倒れたんだっけ……）

明らかな人工物の壁は、天国でも地獄でもなさそうだ。生きているとわかり、少しだけ安心する。死んだ方が楽だったかもしれないが。

壁にかかっている時計を見ると、服薬から四時間が経過している。よく寝たものだ。

そのとき、朔は自分が座っているのがソファではないことに気づく。感触からするとオフィスチェアかもしれない。よく見ると時計の形も違い、気を失う前にいた部屋とは違う場所

のようだ。

（あの三雲って人が移動させたのか？　つか、なんか肩にかかって……髪の毛？）

そのとき、朔ははっと気づく。自分の体勢が明らかにおかしいのだ。

背もたれの後ろに回された両手が、手錠のようなもので拘束されている。そして足が肘置きに固定され、いわゆるM字開脚のような状態になっている。パーカーとブルズンを着てGパンをはいていたはずなのに、視界に入る身体はどこを見ても肌色だ。

（なんだ、これ……何がどうなって……）

自分の身体を凝視して、朔はさらに驚く。手前に見覚えのない双丘がある。大きなそれは柔らかく、ピンク色の突起がついている。その向こう、股の間からは黒い草原がなくなっており、つるりとした肌には、生えているはずのものがなかった。

「えっ……なんで……」

そうつぶやいた自分の声に驚き、朔は言葉を飲み込む。聞き慣れた音より明らかに高い。

首を振ると肩にかかる黒髪が揺れ、髪動きが自分と連動しているとわかる。

（嘘だろ……これじゃまるで……）

「深瀬さん、お目覚めですか？」

正面を向いた視界の中に三雲が現れる。穏やかな微笑みは、目覚める前と全く変わらな
い。

三雲は驚愕する朔に近づき、胸ポケットからウサギのマスコットがついたボールペンを取
り出す。

「これ見えますか？ 見えていたら、ウサギさんを目で追ってください」

ウサギのマスコットが右へ、左へと移動する。朔は何が何だかわからないまま、ウサギに
合わせて眼球を動かす。ウサギが一往復すると、三雲はボールペンをポケットに戻し、朔の
視界の左に抜けた。カタカタという音からして、パソコンに何かを入力しているのだろう。

「視覚と聴覚、言語理解は問題なさそうですね。視界が曇ったり、声が聞き取りにくかった

りはしませんか？」

「は、い……」

喋った自分の声が、やはり気持ち悪い。妹の声^{しゃべ}が自分の口から出ているような違和感だ。しかし喋らないわけにもいかない。あまりにも状況がわからなすぎる。

「あの、三雲さん。これ、何がどうなって……」

「身体の変化のことでしたら薬の作用です。体勢が少しお辛いと思いますが、検査に必要なことですのでご理解ください」

「薬による作用、って……」

（じゃああれは、女になる薬だったってことか……？）

朔の顔から血の気が引く。非合法の薬であることは覚悟していたが、まさかこんなことになるとは思っていなかった。

「これ、元に戻るん……ですか？」

そう尋ねた朔の声は震えている。戻らなかったら、これからの生活をどうしたらいいのか
わからない。

しかし返ってきたのは、無情な言葉だった。

「自然に戻ることはありません。反対の作用の薬は現在開発中で、まだ人による試験が
できる段階には至っていません。陰毛は検査のために剃っただけなので、そのうち生えてきま
すよ」

戻らない。

その答えに朔は絶望する。もう、借金がどうとか言っている場合ではない。

病院に行って治るわけがない。相手を訴えようにも、『健康被害が生じた場合においても、
当社は治療費その他一切の補償を行いません』に同意してしまった。

（どうしよう……どうしよう、どうしよう、どうしようどうしよう）

考えているのに、頭が全く回らない。ただ焦りと後悔だけが、朔の脳内を支配していた。

そんな朔を余所^{よそ}に、三雲は今までと変わらぬ様子で朔に近づく。

「正しく神経が通っているか確認しますので、お身体に触りますね。痛かったら言ってください」

三雲は医療用の手袋を嵌^はめ、朔に両手を向ける。近づいてくるそれから逃げようにも、拘束された手足では何もできない。

指先から肩、首、顔、耳、つま先から足の付け根へと、三雲の手が移動していく。少しずつぐつたいが、耐えられないほどではない。

「では、少し敏感なところに触れていきますね」

そう言って、三雲は朔の骨盤に触れる。手は腰へと上がっていき、やがて目の前の双丘に触れた。

「っ……！」

柔らかそうな肌に指が肌に沈む。それと連動するように、朔の胸元にも圧迫感が訪れた。

（本当に、俺の身体……なのか？）

見えて感じているのに、理解が追い付かない。いや、理解を拒んでいる。目を背けたくて首を横に向けると、同時に肩に触れる髪が揺れる。逃げ場のない現実には、朔の目頭が熱くなつた。

その間にも、三雲は淡々と双丘を揉んでいる。

「これ、触られてる感覚ありますか？ ……深瀬さん、返事できそうですか？」

「は、い……」

「触られてるのわかります？」

「はい……」

逃げられないからと仕方なく答えたが、朔はすぐにそれを後悔する。肯定したことで、頭がこの身体が朔のものだと理解してしまった気がした。

三雲の手が双丘から離れる。朔はほっと息をつくが、それは一瞬の出来事だった。

「では、ここは感じますか？」

「ふぁっ!？」

触れられたのは、先ほどまで揉んでいた双丘の頂——見慣れたものより大きくなった、ピンク色の突起だった。

朔の腰がぞわりとわななく。その震えは、自慰をしているときの感覚に似ていた。

「えっ、感じるって、どういう……」

「ああ、すみません。触られている感じがするかという意味です」

「あ、はい……」

（そういう意味か……）

朔は少しほっとする。もしこのぞわぞわとした感覚のことを聞かれていたら……それを肯定していたら、自尊心を失っていたかもしれない。

三雲の手が、今度こそ双丘から離れる。どうやら、素直に手早く答えていった方がよさそ

うだ。

そう思った直後にも関わらず、次に触れられた場所に、朔は頭が真っ白になった。

「ここはどうですか？」

そこは朔からは見えない……あるはずのない、割れ目の中にある突起だった。

「ひい！」

朔の喉から引きつった音が漏れる。ざらざらとした手袋に擦られ、かゆみに似た痛みが走った。

「わかり、ます……っ！」

「あ、痛かったですか？ 申し訳ありません。痛みが軽減されるよう、クリームを使いますね」

三雲の手が離れ、朔はあと息をつく。確かにそこは敏感な場所だが、ここまでではなかったはずだ。もうそこに朔の知っているものがないとは、まだ認められなかった。

三雲が袋の上からハンドクリームのようなものを塗る。再び同じところに触れられ、朔は顔をしかめる。やはり、どうにも感覚が鋭い。

「痛くないですか？」

「はい……」

（変ではある、けど……）

三雲の指は、形を確かめるようにそこをなぞっている。先端から根元までの距離がずいぶん短いようだが、朔のそこはそんなに小さくなかったはずだ。

三雲の指が滑るように下に移動する。そして訪れた刺激に、朔は目を見開いた。

っふ。

「ぐっ……！」

三雲の指と思われるものが、どこからか朔の体内に侵入している。そこがどこか理解できず、痛みにも襲われ、朔の頭が混乱する。

「い、たい……っ」

「ああ、失礼しました。きちんと神経が通っていることは確認できたので、抜きますね」

ずるりと、圧迫感と痛みが消える。朔はほっとして力を抜く。そして冷静な頭で触れられた場所を考えたとき……朔の心は絶望に塗りつぶされた。

（本当にあれがなくなつて……逆にあれが、俺の身体についてるのか？）

理解したはずなのに、頭がついていかない。使う前に大事なところが失われたことも、死ぬ前に見たいと思っていたものが自分の身体についていることも、全てが信じられなかった。

（なんで、こんな目に……）

朔の視界が水面のように歪む^{ゆが}。しかし危険を承知で薬を飲んだのは朔だ。誰を責めることもできない。

（でも、これで終わりかもしれないし……）

手袋を外す三雲を見ながら、朔は希望を胸に抱く。きっとあとは待つだけで何も無い。そして四時間後には、五百万円が手に入る。

しかしその希望は、あっけなく打ち砕かれた。

「次は感度を見ますので、こちらを頭につけさせていただきます」

三雲が取り出したのは複数本のコードだ。先に小さな吸盤がついている。三雲はそれを一本一本、丁寧に朔の頭に取り付ける。おそらく、脳波計のようなものなのだろう。

（感度、って……）

嫌な予感しかしない中、機械の取り付けが終わる。三雲はパソコンを覗き込み、確認するように「よしっ」と言っている。

三雲はパソコンデスクの引き出しを開く。そして手にしたもの、朔は目を見開いた。

二対の洗濯バサミのようなそれは、片側が妙に厚い。コードが伸び、その先にはスイッチがついている。ピンク色のそれは間違いなく、どう見ても、乳首用のローターだ。

「なんで、そんなもの……」

それで何をするかなど、聞かなくてもわかる。朔の黒い瞳から、とうとう涙がこぼれた。しかし三雲は、穏やかな笑みを向けるだけだった。

「この薬の想定利用者にとって、感度はとても重要なのです。この検査が完了しないと謝礼をお支払いできなくなりますので、すみませんがもう少し我慢いただけますか？」

そう言われると、朔は耐えるしかなくなる。ここまでされて、手ぶらで帰るわけにはいかない。

朔は涙を拭えないまま、ローターが取り付けられるのを眺める。薬を飲む前と比べて大きくなった突起は、とても挟みやすそうだ。

「うっ……」

ぴりつとした痛みを感じ、朔は顔をしかめる。その表情は三雲にも見えているはずだが、彼が反応する様子はない。

「では、一番弱い振動から検査していきますね」

「えっ、待っ……ひいっ！」

ブブブ……

朔が制止する間もなく、三雲が手元のスイッチを入れる。小刻みな揺れが伝わり、朔は反射的に目を見開いた。

「あっ……うう……っ」

（なんだこれ、くすぐったい……っ）

マッサージにも満たない小さな揺れに、朔は身を振る。刺激から逃れたいが、拘束された身体では暴れることもできない。

三雲はパソコンを眺め、「うんうん」と満足するようにうなずいている。

「脳波がきちんと記録できていることが確認できたので、少し出力を上げますね」

三雲がモコンの三角形のボタンを一度押す。強くなったローターの振動は、朔の想像以上

だった。

「ひあつ！！ あつ、あああつ！！！」

朔の身体がビクンと跳ねる。ガクガクと足が震え、骨盤周りがジワリと温かくなってくる。

（なんだこれ……さっきまでと全然違う……！）

体感では倍以上の振動になり、じんじんとした痺れが断続的に訪れる。朔は髪を振り乱し、刺激を逃がそうと身体をくねらせた。

「やめつ、止めて、止めてください！　なんか、変ですう！」

「脳波を見ると、正常に快感を拾えていますよ。基準値内ですので、ご安心ください」

（快、感……？）

三雲の言葉を、朔は認められなかった。おもちゃを無理やりつけられて快感を得ているなど、変態もいいところだ。